

青年期のジェンダー意識が保育架空場面における 幼児の行動評価に及ぼす影響 －保育者養成校と他大学との比較から－

The Influence of Gender Consciousness in Adolescence
on the Behavioral Assessment for Preschoolers in Childcare Simulation
-Comparison between one Childcare Training School and the Other

伊藤 理絵 白川 佳子

Rie ITO Yoshiko SHIRAKAWA

1. はじめに

ジェンダー形成は 2 ～ 3 歳頃から始まるため、幼児期に集団生活を送る保育所や幼稚園の環境が大きな意味をもっている¹⁾。しかし、近年、「ジェンダー」概念そのものに対する誤解や批判が強まっており、「ジェンダー・フリー」についても自由という名の下に、子どもに不自由を強いる結果を招いていると危惧する指摘がなされている²⁾。今日の保育領域では、異性愛主義や男女二元論から脱出することが未だ実現できていない状況もあり³⁾、保育の現場では、知らず知らずのうちにジェンダー関連の問題について、マジョリティに焦点を当てた対応がなされていることが推測される。このような現状を鑑みると、保育における幼児教育に携わる者が「ジェンダー」概念の多義性を考慮せずにいれば、保育者自身のジェンダー意識が無意識に保育活動に影響を及ぼす可能性は十分に考えられる。

それでは、保育士および幼稚園教諭として、将来幼児教育に携わることを希望する大学生は

どのようなジェンダー意識をもっているのだろうか。幼稚園教諭および保育士養成課程に進学した大学生のジェンダー意識は、他の福祉系の学科を専攻する大学生と異なっているのだろうか。また、両者においてジェンダー意識と幼児の行動評価の結果に差は見られるのだろうか。

本研究は、幼稚園教諭および保育士養成課程（以下、保育者養成校）の 1 年生と、他大学の幼児教育関連以外の福祉系の学部（以下、他大学）に所属する大学生におけるジェンダー意識、およびジェンダー意識がもたらす幼児の行動評価への影響について検討することを目的とし、養成校におけるジェンダー教育のあり方を検討する。

2. 方法

幼稚園や保育所等での実習を経験していない保育者養成校 1 年生 110 名および他大学に所属する大学生 133 名に 7 月上旬、ジェンダー意識と幼児の行動評価に関する質問紙調査を実施した。分析対象者は、保育者養成校が女子大学であったため、女子学生に限定し、回答に不

備のなかった保育者養成校の 1 年生 95 名（平均年齢 18.36 歳）と他大学の 2 年生から 4 年生 68 名（平均年齢 19.38 歳）とした。なお、他大学の学生のうち、22 名は高校の教育実習や社会福祉系の施設での実習を経験していた。

ジェンダー意識を検討するための質問は、先行研究^{2) 4) 5)}を参考に、「女性および男性にとっての重要性」「3 歳から 5 歳の男女の違い」「保育園や幼稚園における男女別の望ましさ」「子育てや保育・幼児教育の方針に対する賛否」について、質問項目を設定した。ジェンダー意識を検討するための質問内容を表 1 に示す。各質問について、5 件法による回答を求めた。

幼児の行動評価については、5 歳から 6 歳くらいの幼児（年長児）のエピソードを読んで回答する質問を設定した。呈示するエピソード

として、保育架空場面のエピソードを作成した。エピソードの作成にあたり、就学年齢までに男児は下品な言葉や遊びでふざけることを多く示し⁶⁾、幼児でも無視等の関係性攻撃は女性が行いやすく、身体的攻撃は男性が行いやすいという信念をもっている傾向が示唆されている⁷⁾ことから、行動評価にジェンダー意識が影響されると推測される場面として、幼児のふざけ行動と攻撃行動を取り上げることにした。

保育架空場面は、実際の保育場面を観察して記録した内容を基に、架空のエピソードを作成した。エピソードの行動のタイプは、ふざけ行動、直接的攻撃（叩く、蹴る）、関係性攻撃（無視）の 3 種類とした。なお、保育架空場面で取り上げたエピソードは、攻撃行動については男女ともに見られた実際のエピソードを基にしているが、ふざけ行動の基になった実際の場面は、女児が行為者であった。

表 1 ジェンダー意識に関する質問項目

Q1. 女性および男性にとっての重要性 (各項目について女性および男性にとってそれぞれ 1. 全く重要でない～5. 非常に重要) ①つよい ②かわいい ③線の太い ④従順な ⑤経済力のある ⑥美しい ⑦指導力のある ⑧気持ちのこまやかな ⑨無頓着な ⑩家庭的な
Q2. 3 歳から 5 歳の男女の違い (各項目について 1. 小さいかほとんどない～5. 大きい) ①身体的能力 ②知的能力 ③活動性 ④感情の表し方 ⑤興味や関心の対象
Q3. 保育園や幼稚園における男女別の望ましさ (各項目について 1. 望ましくない～5. 望ましい) ①靴箱の配置などを男女別にする。 ②男の子に青や緑、女の子にはピンクや赤の物品や教材を与える。 ③女の子には人形、男の子には自動車など、違うおもちゃを与える。 ④「女の子だから」「男の子だから」というように、男女ではめ方や教え方が異なる。 ⑤動物の世話に男の子、配膳は女の子というように、男女で異なる手伝いを頼む。 ⑥園児を集合させるときに、男女別に並べる。
Q4. 子育てや保育・幼児教育の方針に対する賛否 (各項目について 1. 反対～5. 賛成) ①男女を同じように扱って、男女の違いや差が生じさせないようにすべきである。 ②できるだけ男女は同じように扱うのがよいが、男女の身体的な違いには配慮すべきである。 ③女の子は女らしく、男の子は男らしく育つよう配慮すべきである。 ④社会的に作られた男女差をなくするために、積極的な働きかけをすべきである。 ⑤子どもの自主性や子どもの個性を最優先すべきである。

表 2 幼児の行動評価のエピソード

行動の種類	エピソード名	エピソード内容
ふざけ行動	だらだら	プール後、J は笑いながら「汗もダラダラ、おしりもダラダラ、うんちもダラダラ」と言って、着替えている。
	おっぱい祭り	A は服を脱ぐと、「おっぱい、おっぱい、おっぱい祭り」と言いながら着替えている。
直接的攻撃	クレヨン貸して	絵を描いていた B が、隣の C に「クレヨン貸して」と言う。C が「いやだ」と断ると、B は C を叩く。C が「叩かないで!」と言うと、B は笑いながら「ああ、おもしろい」と言う。
	けらないで	F と G がおもちゃの取り合いになり、F が G を蹴る。G が「蹴らないで!」と言うと、F は「ああ、おもしろい」と言う。
関係性攻撃	もう話さない	K は L が近くにいないことを確認してから、笑いながら「これからは L と話をしないことにしよう」と仲間提案する。
	もう遊ばない	D は E が近くにいないことを確認してから、「これからは E と遊ばないことにしよう」と仲間提案する。

ふざけ行動には笑いを伴う場合が多いため⁹⁾、各行動のタイプに笑いの有無を組み合わせた。よって、呈示したエピソード数は、3種類の行動タイプ（ふざけ・直接的攻撃・関係性攻撃）に笑いの有無を組み合わせた計6エピソードであった。エピソードの内容を表2に示す。

エピソードの呈示順序は、異なる2パターンを作成し、カウンターバランスをとった。呈示順序のパターンは、Aパターンが、ふざけ行動「だらだら」→直接的攻撃「クレヨン貸して」→関係性攻撃「もう話さない」→関係性攻撃「もう遊ばない」→直接的攻撃「けらないで」→ふざけ行動「おっぱい祭り」、Bパターンが、ふざけ行動「おっぱい祭り」→直接的攻撃「けらないで」→関係性攻撃「もう遊ばない」→関係性攻撃「もう話さない」→直接的攻撃「クレヨン貸して」→ふざけ行動「だらだら」とし、ジェンダー意識を検討する質問の前に呈示した。

幼児の行動評価は、行動の望ましさ（1. とても悪い～5. とても良い）と性別予測（1. 男の子～5. 女の子）について、5件法により回答を求めた。行動評価の質問内容は、ふざけ行動では、①行為児の行動の望ましさ、②行為児の性別予測、③行為児が男児だった場合の行動の望ましさ、④行為児が女児だった場合の行動の望ましさの4項目に関する質問を行った。

直接的攻撃については、①加害児の行動の望ましさ、②加害児の性別予測、③被害児の行動の望ましさ、④被害児の性別予測、⑤加害児および被害児ともに男児だった場合の加害児の行動の望ましさ、⑥加害児が男児、被害児が女児だった場合の加害児の行動の望ましさ、⑦加害児が女児、被害児が男児だった場合の加害児の行動の望ましさ、⑧加害児および被害児ともに女児だった場合の加害児の行動の望ましさの8項目に関する質問を行った。

関係性攻撃については、①加害児の行動の望ましさ、②加害児の性別予測、③被害児の性別予測、④加害児および被害児ともに男児だった場合の加害児の行動の望ましさ、⑤加害児が男

児、被害児が女児だった場合の加害児の行動の望ましさ、⑥加害児が女児、被害児が男児だった場合の加害児の行動の望ましさ、⑦加害児および被害児ともに女児だった場合の加害児の行動の望ましさの7項目に関する質問を行った。

すべての質問について、あまり考え込まず率直に回答するよう求め、質問紙を実施する際は、授業担当教員と話し合い、授業に差し支えない15分間を回答時間にあて、その日のうちに回収した。

3. 結果

各質問について、保育者養成校の女子学生と他大学の女子学生の回答を比較するため、t検定を行った。結果について、有意差が見られた項目を中心に、ジェンダー意識および幼児の行動評価について検討していく。

①ジェンダー意識の比較

ジェンダー意識に関する各項目の結果を表3～6に示す。

「女性にとっての重要性」については、「かわいい」($t=2.83, df=161, p<.01, d=0.45$)「従順な」($t=4.69, df=152.65, p<.01, d=0.73$)「美しい」($t=2.20, df=161, p<.05, d=0.34$)「指導力のある」($t=2.37, df=148.56, p<.05, d=0.38$)「気持ちのこまやかな」($t=3.25, df=161, p<.01, d=0.52$)「家庭的な」($t=3.73, df=104.72, p<.01, d=0.65$)の項目について、いずれの項目についても、保育者養成校の女子学生の方が女性にとって重要であると感じていた（表3）。

「男性にとっての重要性」については、「つよい」($t=3.19, df=161, p<.01, d=0.51$)「線の太い」($t=3.36, df=161, p<.01, d=0.54$)「経済力のある」($t=2.48, df=161, p<.05, d=0.40$)「指導力のある」($t=2.69, df=161, p<.01, d=0.43$)「家庭的な」($t=2.21, df=161, p<.05, d=0.36$)の項目について、いずれの項目についても、保育者養成校の女子学生の方が男性にとって重要であると感じていた（表3）。

表 3 女性および男性にとっての重要性の平均値 (SD) と t 検定の結果 (効果量 d)

* p<.05, ** p<.01

質問項目	保育者養成校 (n=95)	他大学 (n=68)	t 値 (d)	
① つよい	3.18(0.93)	3.19(0.86)	n.s. (0.01)	
② かわいい	4.16(0.69)	3.83(0.69)	2.83(0.45)	**
③ 線の太い	3.12(0.91)	2.92(0.77)	n.s. (0.23)	
④ 従順な	3.52(0.87)	2.91(0.78)	4.69(0.73)	**
⑤ 経済力のある	3.41(0.91)	3.41(0.71)	n.s. (0.00)	
⑥ 美しい	4.16(0.69)	3.91(0.78)	2.20(0.34)	*
⑦ 指導力のある	3.72(0.81)	3.42(0.77)	2.37(0.38)	*
⑧ 気持ちのこまやかな	4.44(0.63)	4.07(0.81)	3.25(0.52)	**
⑨ 無頓着な	2.58(0.86)	2.66(0.70)	n.s. (0.10)	
⑩ 家庭的な	4.61(0.57)	4.14(0.90)	3.73(0.65)	**
① つよい	4.43(0.59)	4.10(0.71)	3.19(0.51)	**
② かわいい	2.58(0.79)	2.63(0.68)	n.s. (0.07)	
③ 線の太い	3.91(0.83)	3.48(0.76)	3.36(0.54)	**
④ 従順な	3.33(0.97)	3.07(0.88)	n.s. (0.28)	
⑤ 経済力のある	4.50(0.77)	4.20(0.74)	2.48(0.40)	*
⑥ 美しい	2.82(0.88)	2.88(0.74)	n.s. (0.07)	
⑦ 指導力のある	4.22(0.73)	3.91(0.70)	2.69(0.43)	**
⑧ 気持ちのこまやかな	3.77(0.80)	3.63(0.84)	n.s. (0.17)	
⑨ 無頓着な	2.75(1.11)	2.67(0.74)	n.s. (0.08)	
⑩ 家庭的な	3.82(0.82)	3.52(0.83)	2.21(0.36)	*

表 4 3 歳から 5 歳の男女の違いの平均値 (SD) と t 検定の結果 (効果量 d)

質問項目	保育者養成校 (n=95)	他大学 (n=68)	t 値 (d)
① 身体的能力	3.49(1.52)	3.35(1.45)	n.s. (0.09)
② 知的能力	3.48(1.50)	3.35(1.42)	n.s. (0.09)
③ 活動性	3.41(1.33)	3.41(1.22)	n.s. (0.00)
④ 感情の表し方	3.71(1.23)	3.86(1.17)	n.s. (0.12)
⑤ 興味や関心の対象	3.89(1.28)	4.07(1.08)	n.s. (0.15)

「3 歳から 5 歳の男女の違い」については、保育者養成校と他大学の女子学生との平均値に有意な差は見られなかったが、いずれの項目についても平均値は 3 以上であり、「身体的能力」「知的能力」「活動性」「感情の表し方」「興味や関心の対象」における 3 歳から 5 歳の男女の違いは、全体的に中央値の「3. どちらとも言え

表 5 保育園や幼稚園における男女別の望みしさの平均値 (SD) と t 検定の結果 (効果量 d)

* p<.05

質問項目	保育者養成校 (n=95)	他大学 (n=68)	t 値 (d)	
① 靴箱の配置などを男女別にする。	2.29 (1.10)	2.45 (1.11)	n.s. (0.14)	
② 男の子に青や緑、女の子にはピンクや赤の物品や教材を与える。	2.73 (1.18)	2.36 (0.97)	2.10 (0.34)	*
③ 女の子には人形、男の子には自動車など、違うおもちゃを与える。	2.46 (1.23)	2.10 (1.08)	n.s. (0.31)	
④ 「女の子だから」「男の子だから」というように、男女でほめ方や教え方が異なる。	1.71 (0.95)	2.00 (1.18)	n.s. (0.28)	
⑤ 動物の世話や男の子、配膳は女の子というように、男女で異なる手伝いを頼む。	1.85 (0.99)	1.66 (0.92)	n.s. (0.20)	
⑥ 園児を集めさせるときに、男女別に並べる。	2.83 (1.11)	2.70 (1.07)	n.s. (0.12)	

表 6 子育てや保育・幼児教育の方針に対する賛否の平均値 (SD) と t 検定の結果 (効果量 d)

** p<.01

質問項目	保育者養成校 (n=95)	他大学 (n=68)	t 値 (d)	
① 男女を同じように扱って、男女の違いや差が生じさせないようにすべきである。	4.29 (0.88)	3.69 (1.10)	3.71 (0.61)	**
② できるだけ男女は同じように扱うのがよいが、男女の身体的な違いには配慮すべきである。	4.55 (0.82)	4.54 (0.72)	2.83 (0.01)	
③ 女の子は女らしく、男の子は男らしく育つよう配慮すべきである。	3.23 (1.08)	2.76 (0.97)	2.81 (0.45)	**
④ 社会的に作られた男女差をなくすために、積極的な働きかけをすべきである。	4.34 (0.68)	3.95 (0.90)	3.01 (0.50)	**
⑤ 子どもの自主性や子どもの個性を最優先すべきである。	4.82 (0.43)	4.55 (0.69)	2.73 (0.49)	**

ない」に集中していた (表 4)。

また、保育園や幼稚園で性別に応じて色の違う物品や教材を与えること (t= 2.10, df=161, p<.05, d=0.34) (表 5 ②)、子育てや保育の方針として、男女差が生じない働きかけを行うこと (t= 3.71, df=123.70, p<.01, d=0.61)、女の子らしさ・男の子らしさを配慮すること (t= 2.81, df

=161, $p<.01$, $d=0.45$)、ジェンダーをなくす積極的な働きかけを行うこと ($t=3.01$, $df=118.39$, $p<.01$, $d=0.50$)、子どもの自主性や個性を尊重すること ($t=2.73$, $df=103.91$, $p<.01$, $d=0.49$) に関する項目について (表 6 ①, ③~⑤)、保育者養成校の学生の方が高い値を示していた。し

かし、保育者養成校の女子学生も他大学の女子学生も、「できるだけ男女は同じように扱うのがよいが、男女の身体的な違いには配慮すべきである」ことに対して有意な差は見られず、肯定していた (表 6 ②)。

なお、10%水準ではあったが、保育園や幼稚

表 7 幼児の行動評価の平均値 (SD) と t 検定の結果 (効果量 d)

* $p<.05$, ** $p<.01$

行動の種類	エピソード	質問項目		保育者養成校 (n=95)	他大学 (n=68)	t 値 (d)	
ふざけ行動	だだだ (笑い有)	行動の望ましさ	①行為児	2.51 (0.74)	2.76 (0.71)	-2.14 (0.34)	*
		性別予測	②行為児	1.51 (0.58)	1.73 (0.68)	-2.21 (0.35)	*
		行為児の行動の望ましさ	③行為児・男児	2.56 (0.73)	2.75 (0.60)	n.s. (0.28)	
			④行為児・女児	2.17 (0.75)	2.39 (0.75)	n.s. (0.29)	
	おっぱい祭り (笑い無)	行動の望ましさ	①行為児	2.60 (0.65)	2.75 (0.65)	n.s. (0.23)	
		性別予測	②行為児	2.08 (0.95)	2.19 (0.91)	n.s. (0.12)	
		行動の望ましさ	③行為児・男児	2.64 (0.63)	2.72 (0.64)	n.s. (0.13)	
			④行為児・女児	2.62 (0.65)	2.70 (0.67)	n.s. (0.12)	
直接的攻撃	クレヨン貸して (笑い有)	行動の望ましさ	①加害児の行動の望ましさ	1.37 (0.52)	1.55 (0.65)	n.s. (0.31)	
		性別予測	②加害児の性別予測	2.23 (0.89)	2.42 (0.91)	n.s. (0.21)	
		行動の望ましさ	③被害児	2.78 (0.93)	2.67 (0.78)	n.s. (0.13)	
		性別予測	④被害児	3.21 (0.94)	3.20 (0.97)	n.s. (0.01)	
		加害児の行動の望ましさ	⑤加害児・男児ー被害児・男児	1.65 (0.69)	1.94 (0.80)	-2.43 (0.39)	*
			⑥加害児・男児ー被害児・女児	1.40 (0.60)	1.73 (0.76)	-2.99 (0.49)	**
			⑦加害児・女児ー被害児・男児	1.60 (0.64)	1.88 (0.82)	-2.46 (0.39)	*
			⑧加害児・女児ー被害児・女児	1.60 (0.64)	1.85 (0.79)	-2.24 (0.35)	*
	けらないで (笑い無)	行動の望ましさ	①加害児の行動の望ましさ	1.28 (0.49)	1.38 (0.51)	n.s. (0.20)	
		性別予測	②加害児の性別予測	1.80 (0.73)	2.04 (0.81)	-1.99 (0.31)	*
		行動の望ましさ	③被害児	3.58 (0.81)	3.32 (0.80)	2.06 (0.32)	*
		性別予測	④被害児	2.83 (1.17)	3.08 (1.06)	n.s. (0.22)	
		加害児の行動の望ましさ	⑤加害児・男児ー被害児・男児	1.71 (0.79)	1.86 (0.77)	n.s. (0.19)	
			⑥加害児・男児ー被害児・女児	1.30 (0.56)	1.54 (0.76)	-2.18 (0.37)	*
			⑦加害児・女児ー被害児・男児	1.56 (0.67)	1.72 (0.72)	n.s. (0.23)	
			⑧加害児・女児ー被害児・女児	1.62 (0.73)	1.85 (0.77)	n.s. (0.31)	
関係性攻撃	もう話さない (笑い有)	行動の望ましさ	①加害児の行動の望ましさ	1.45 (0.69)	1.55 (0.69)	n.s. (0.14)	
		性別予測	②加害児の性別予測	3.28 (1.09)	3.25 (1.09)	n.s. (0.03)	
			③被害児の性別予測	3.36 (1.04)	3.27 (1.03)	n.s. (0.09)	
		加害児の行動の望ましさ	④加害児・男児ー被害児・男児	1.63 (0.75)	1.73 (0.70)	n.s. (0.14)	
			⑤加害児・男児ー被害児・女児	1.60 (0.73)	1.76 (0.77)	n.s. (0.21)	
			⑥加害児・女児ー被害児・男児	1.54 (0.71)	1.76 (0.77)	n.s. (0.30)	
			⑦加害児・女児ー被害児・女児	1.48 (0.68)	1.63 (0.73)	n.s. (0.21)	
	もう遊ばない (笑い無)	行動の望ましさ	①加害児の行動の望ましさ	1.37 (0.63)	1.51 (0.68)	n.s. (0.21)	
		性別予測	②加害児の性別予測	3.57 (1.00)	3.35 (1.01)	n.s. (0.22)	
			③被害児の性別予測	3.55 (0.96)	3.29 (0.96)	n.s. (0.27)	
		加害児の行動の望ましさ	④加害児・男児ー被害児・男児	1.53 (0.71)	1.79 (0.82)	-2.13 (0.34)	*
			⑤加害児・男児ー被害児・女児	1.53 (0.72)	1.83 (0.83)	-2.44 (0.39)	*
			⑥加害児・女児ー被害児・男児	1.53 (0.69)	1.85 (0.83)	-2.63 (0.43)	**
			⑦加害児・女児ー被害児・女児	1.41 (0.64)	1.63 (0.80)	n.s. (0.31)	

園において性別に応じて違うおもちゃを与えることについて(表 5 ③)、保育者養成校の女子学生の方が望ましくないとしながらも、他大学の女子学生よりも高い値を示していた($t=1.93$, $df=161$, $p<.10$, $d=0.31$)。

② 幼児の行動評価の比較

幼児の行動評価に関する結果を表 7 に示す。

ふざけ行動については、保育者養成校および他大学の女子学生ともに男児が行為者になりやすく、かつ望ましくない行動であると評価していた。特に、保育者養成校の女子学生の方が、笑いを伴うふざけ行動をより悪い行動であると評価し($t=-2.14$, $df=161$, $p<.05$, $d=0.34$)、行為者について男の子と見なす傾向が強かった($t=-2.21$, $df=161$, $p<.05$, $d=0.35$)。なお、ふざけ行動の保育架空場面の基になった実際のエピソードの行為者は女児であったが、保育者養成校および他大学の女子学生ともに男児と予想する傾向がみられた。

攻撃行動は、直接的攻撃も関係性攻撃も、保育者養成校および他大学の女子学生ともに望ましくない行動と評価していた。特に、直接的攻撃については、保育者養成校の女子学生の方が、笑いの有無に関わらず、加害児が男児で被害児が女児であった場合に、加害者の行動をより悪いと評価する傾向が強かった(笑いの有: $t=-2.99$, $df=123.35$, $p<.01$, $d=0.49$, 笑いの無: $t=-2.18$, $df=117.41$, $p<.05$, $d=0.37$)。笑いを伴う直接的攻撃(エピソード「クレヨン貸して」)では、保育者養成校の女子学生の方が、加害児の行動についてどの性別の組み合わせであっても、他大学の女子学生よりも、より望ましくないと評価していた。笑いの伴わない直接的攻撃(エピソード「けらないで」)については、保育者養成校および他大学の女子学生ともに、加害児を男児と予測し、被害児が「蹴らないで!」と主張する行動の望ましさを「3. 良いとも悪いとも言えない」と評価する傾向があったが、保育者養成校の女子学生の方が加害児を男児と予測す

る傾向が強く($t=-1.99$, $df=161$, $p<.05$, $d=0.31$)、他大学の女子学生の方が被害児の行動の望ましさを低く評価する傾向が見られた($t=2.06$, $df=161$, $p<.05$, $d=0.32$)。

また、関係性攻撃については、保育者養成校および他大学の女子学生ともに、加害者および被害者について、どちらかの性別にも推測しにくいエピソードであると評価していた。しかし、保育者養成校の学生の方が、笑いを伴わない仲間外れ(エピソード「もう遊ばない」)については、加害者および被害者ともに女児である組み合わせを除いて、他大学の女子学生よりも、悪い行動であると評価していた(男児-男児: $t=-2.13$, $df=161$, $p<.05$, $d=0.34$, 男児-女児: $t=-2.44$, $df=161$, $p<.05$, $d=0.39$, 女児-男児: $t=-2.63$, $df=161$, $p<.01$, $d=0.43$)。

4. 考察

一般社会において、「ジェンダー」や「ジェンダー・フリー」という用語の統一性が明確に示されていない現状で、ジェンダー形成が始まる時期の幼児に関わることになる保育者養成校の学生が、どのようなジェンダー意識をもっており、それが幼児の行動の評価にどのような影響を及ぼしているのかを検討することは、養成校における教育のあり方にも関連する課題であると思われる。

本研究の結果、保育者養成校の女子学生も他大学の女子学生も、子育てや保育・幼児教育の方針について、「できるだけ男女は同じように扱うのがよいが、男女の身体的な違いには配慮すべきである」と考えており、身体的な性差を考慮した上でのジェンダー・フリーの保育や子育てに賛成していた。その上で、保育者養成校の女性学生は、「女の子は女らしく、男の子は男らしく育つよう配慮すべきである」ことに対して他大学の女子学生よりも賛成する傾向にあった。

また、本研究の結果からは、保育者養成校に所属する 1 年生の女子学生は、他大学の 2 ～

4年生の女子学生と比較して、子育てや保育・幼児教育の方針として、なるべく子ども一人ひとりの自主性や個性を重視した教育が望ましく、男女差の違いや差が生じない働きかけをより重視していることが示唆された。それは、社会的に作られた男女差をなくすような積極的な働きかけをすべきという考えをより強く持っているという結果でも示されていた。一方で、他大学的女子学生の方が、男女別に色分けした物品や教材を与えることについて、より望ましくないと考えていた。家庭から園に持ち込まれるものには「女の子はピンク、男の子はブルー」という色にまつわるジェンダー文化が根強くある¹⁾ため、保育者養成校の女子学生は、保育や幼児教育の現場に性別で色分けされることは望ましくないと考えながらも、他大学的女子学生よりは許容する傾向があるのかもしれない。ただし、おもちゃを男女別で与えることについても、10%水準ではあるが、保育者養成校の女子学生の方が望ましくないとしながらも、他大学的女子学生よりは許容している傾向が示唆されていた。よって、保育者養成校の女子学生の方が、女性らしさとして“かわいさ”“従順さ”“美しさ”“気持ちのこまやかさ”を、男性らしさとして“つよさ”“線の太さ”“経済力”をより強く意識しているという、保育者養成校と他大学的女子学生とのジェンダー意識の差が保育や子育ての方針に対する考えの差となって表れた可能性も十分に考えられる。保育者養成校の女子学生が幼児教育の場における隠れたカリキュラムと自分自身が抱くジェンダー意識にどの程度関連性を見出し、保育や子育ての方針に対する考えに反映させているのかは、今後さらに検討すべき課題であると考えられる。

かつて伝統的とみなされがちだった「たくましさ」という男性的特性や「やさしさ」という女性的特性がジェンダー・ステレオタイプとして機能しなくなり、自己評価においては脱ステレオタイプ化しているという指摘⁴⁾がある一方で、大学生および成人に「男らしさ」や「女ら

しさ」に対する考えを自由記述で回答を求めた結果では、従来から示されているジェンダー意識とはほぼ同様であるという指摘⁹⁾もある。保育者養成校の女子学生は、他大学的女子学生よりも、伝統的な女性らしさや男性らしさに特徴的な項目について、より強く意識している傾向が見られていたが、その一方で、保育者養成校の女子学生は、女性および男性における“指導力”について、他大学的女子学生よりも重要性を感じており、また、男性が“家庭的”であることの重要性も強く意識していた。この結果は、保育者養成校の女子学生が、社会的および文化的に望ましいとされる男女の特性を意識しながらも、近年の子ども・子育て支援制度における男性も女性も仕事と生活が調和する社会の実現（ワーク・ライフ・バランスの実現）¹⁰⁾という、子どもと子育てを応援する社会の実現に寄与する職業に将来携わる意識をもっている表れとも思われる。保育者養成校の女子学生は、他大学的女子学生よりも、男性保育士や父親の育児参加について考え、肯定的に捉えていることが推察される。若い父親の育児参加が広がりつつあると言われている現在¹⁰⁾、ワーク・ライフ・バランスの実現に向けた若者の意識がジェンダー意識に与える影響について検討することも今後の課題の一つとしたい。

また、保育者養成校と他大学的女子学生の間でみられたジェンダー意識に関する差異は、ふざけ行動や攻撃行動を行う幼児の性別予想や行動評価の結果にも、部分的に反映されていた。

保育者養成校と他大学的女子学生ともに、「身体的能力」「知的能力」「活動性」「感情の表し方」「興味や関心の対象」における幼児の男女の違いは、全体的に「どちらとも言えない」とする回答が目立った。しかし、性別予測では、ふざけ行動についてエピソードの基になった実際の行為者は女児であったのに反して、男児を予測していた。加えて、保育者養成校の女子学生の方が、笑いを伴うふざけ行動を行う幼児を男児だと推測しやすい傾向がみられ、かつより悪い

行動であると評価していた。男児が下品な言葉や遊びでふざけることを多く示す傾向⁶⁾は以前より指摘されているが、保育者養成校の女子学生の方が、ふざけ行動に対して従来のジェンダー意識に依拠した推測をした上で、幼児の行動を評価したと考えられる。

さらに、保育者養成校の女子学生は、直接的攻撃を女児に対して行う男児の行動をより悪い行動であると評価していた。叩く、蹴るなどの直接的攻撃を男児が女児に対して行うことは、「つよさ」を男らしさとして重視する保育者養成校の女子学生にとって、「かわいい」「従順な」女児を叩いたり蹴ったりする男児の行動は望ましくないものであると評価しやすいことが示唆される。

人間は、社会の中で共に生きていく存在であり、そのためには所属する社会の人々の多くがもっている価値観を受容しつつ自分の欲求や行動を実現していく必要があり、幼児期はその基盤を培う重要な時期である¹¹⁾。様々な背景をもった子どもたちが集う幼児教育の場で専門家として実践を行う保育者には、マジョリティの視点だけでなく、マイノリティの視点からも目の前の子どもたちを理解することが専門性として要求されると思われる。日々の幼児の言動を適切に把握し、対応するためには、幼児教育に関わる保育者が社会のジェンダー意識に自覚的になるとともに、自分の抱くジェンダー意識にも自覚的になる必要があると考えられる。また、そのような観点を保育者育成に関わる者がもつことは、日々の保育を多様な視点から捉え直す「反省的实践者」¹²⁾を養成課程で育成することにつながる一つのアプローチとしても役立つのではないだろうか。

今後、保育者養成校での学びがジェンダー意識や幼児の行動評価に与える影響について、保育者養成校の女子学生だけでなく男子学生も含め、実習経験等の学習経験の内容も加味した上で横断的および縦断的に研究を進める必要があると思われる。同時に、比較する他大学生の対

象も広げることで、青年期におけるジェンダー意識との関連を、より詳細に検討していくことも必要であろう。

5. 結論

本研究では、幼稚園および保育所での実習未経験者を対象に、保育者養成校 1 年生と他大学の 2 年生から 4 年生である女子学生におけるジェンダー意識がもたらす幼児の行動評価への影響について検討した。保育者を目指す 1 年生は、前期授業での学びを通して、知識としてジェンダーに囚われない保育・幼児教育を重視しながらも、「女の子は女らしく、男の子は男らしく」配慮することが重要だと理解していた。しかし、自分の抱いているジェンダー観や保育・幼児教育の方針が無意識に幼児の行動評価に影響を与えていることへの自覚にまでは至っていない可能性も考えられる。

したがって、幼児教育に携わる学生の教育に関わる者は、自分の価値観が子どもの行動の解釈に影響を及ぼすことを、ジェンダー意識という観点から伝えていく視点をもつことも考慮に入れる必要があるのではないだろうか。

謝辞

本調査を進めるにあたり、ご協力くださった大学生の皆さま、金子充先生（立正大学）に感謝いたします。

付記

本研究は白梅学園大学・短期大学の倫理審査委員会による承認を得ている（申請番号 201405）。また、本研究の結果の一部は、日本乳幼児教育学会第 24 回大会にて発表した。

参考文献

- 1) 青野篤子：園の隠れたカリキュラムと

- 保育者の意識. 福山大学人間文化学部紀要, 8, 19-34 (2008).
- 2) 青野篤子: ジェンダー・フリー保育. 東京: 多賀出版 (2012).
- 3) 永田麻詠: 保育における性的マイノリティとクィアー子どもと性をめぐる今日的課題 -. 子ども未来学研究, 7, 5-9 (2012).
- 4) 鈴木淳子: ステレオタイプとジェンダー. 鈴木淳子・柏木恵子 (著). ジェンダーの心理学 心と行動への新しい視座. pp. 69-101, 東京: 培風館 (2006).
- 5) 湯川隆子: 大学生におけるジェンダー (性役割) 特性語の認知 - ここ 20 年の変化 -. 三重大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 53, 73-86 (2002).
- 6) McGhee, P.E.: Humor: Its origin and development. San Francisco, CA: Freeman (1979). (島津一夫 (監訳): 子どものユーモア - その起源と発達 -. 東京: 誠信書房 (1999).
- 7) Giles, J. D., & Heyman, G. D.: Young Children's Beliefs About the Relationship Between Gender and Aggressive Behavior. Child Development, 76(1), 107-121 (2005).
- 8) 平井信義・山田まり子: 子どものユーモア: おどけ・ふざけの心理. 大阪: 創元社 (1989).
- 9) 高井範子・岡野孝治: ジェンダー意識に関する検討 - 男性性・女性性を中心にして -. 太成学院大学紀要, 11, 61-73 (2009).
- 10) 厚生労働省: 平成 25 年版厚生労働白書 - 若者の意識を探る -. 東京: 日経印刷 (2013).
- 11) 文部科学省: 幼稚園における道德性の芽生えを培うための事例集. 大阪: ひかりのくに (2001).
- 12) 無藤隆: 幼児教育の原則 - 保育内容を徹底的に考える -. 京都: ミネルヴァ書房 (2009).